



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市社会学：昭和28年度特殊講義案 第3巻
Author(s)	鈴木，栄太郎
Description	東洋大学社会学部大学院社会学研究科講義案。職域集団、生活拡充集団、政治的組織、血縁近隣関係友人学友の関係
Issue Date	1953
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77410
Type	manuscript
File Information	N003_01S28.pdf



コ-アウ
ニ-ノ
ト

N
5
A

NOTE BOOK

都市社会学

二十八年序

特殊讲义案

第三卷

特殊讲义案
特殊讲义案
特殊讲义案 (特殊讲义案)
特殊讲义案 (特殊讲义案)
特殊讲义案 (特殊讲义案)
特殊讲义案 (特殊讲义案)

本ノートの内容

カニ市職域集同
カ五市全全地立集同
カ六市政治的組織
カ七市血縁近隣同僚友人学友の定型的
同好

人の社会的成長の段階として最初に就学
前と後とは別の段階にあるし、次の段階
のゆゑに世帯内に留まる。時代と場所の街
路に交友を結ぶに至つた後とは又別の
の段階をたしめて行くのである。

就学と密に子供の生活圏は俄かに拡大
する。都市には色々の職業や階層の人
々の子弟が同一の学級内に集まらねばとし
て子供はそれ等の差あはれを関係に交友
する。そして同一の学級内からほんの二三人の
親しい友人を作る。都市の人に流動性は
学級内にも影響がある。皆であるから小学校

の六年間に轉校して来り者ある者の数は相
当に多し。戦後の交通も亦激し。其年
の事情は次の如し。調査の結果に依り
かた。その年の流動が都市の地帯に
いかに多量な分へかは異なり。同様に
い。

その後は子供の生活圏を形成するものであ
り。子供を通じて父兄の間に良好な関係を
作り出す。特に親しい子供年の父兄や母
兄の間に親しい交友の関係を築く。如
し。凡そそれが都市に於ける社会生活に
いかなる偏りを生ずるかを知る事である。

の二つをたとして

作は、卒業後に徳島の同僚がどの位長くそ
んな形で存続するかを知らずによつて暗かに
わづらひ、さういふ事ある。次の朝は只一休
つゝあつた。

次に中學校はわづらひと大任を後に同僚とあ
ら、高きわづらひや大任は白か、四角、一尺、

既に示へた様にこれ等の高のそのわづらひ

をわづらひは戦場に往くもの準備行程と

は、(な)として、(な)として、(な)として、(な)として、

いふ事は卒業して重宝に同僚は、戦場に往く

るわ、(な)として、(な)として、(な)として、(な)として、

いふ事は、(な)として、(な)として、(な)として、(な)として、

ある業務の職場を指してあらう。彼が医者の
同僚や。職場につくうは全然あつた。その
おいて高き知識はたしかに職業に就く準備
的行動を促して居る。行動の内容も社会環境に
おいて心と職業時代と余り異なつてはな
う。は命令による行動であり一は自発的に
学習とあるは甚だしい自由である。お
きにその片断を模倣の行動原則に就くと
いふ事は同様である。一は生活態度とある
は生活態度でありしるは生活態度である。
この生活態度は一。の模倣とあるは生活態度
である。何れにしてもそれらは職場生活に
あつた。

先行して其のころ乙常を治つた。而して
乙常を治つた。又、都市を治め、或して其
の常を一とまとし、多税するは出来ぬ。

学校生活は同じ研究家は、それと異なり、
 なす振るまいで、心正し、大衆的傾向は見え
 片。教育者としてのその研究は、
 現に著大い。都市社会学は、
 研究資料を必要とする。

④ かくの如く家族が生業において

協力的な一団体を形成し、家族の

生活文化の場として、^{生活文化} 家族を

生業の場とする事か、恐らく永い

了の人々の生活様式であった。

あうう。その場合その共同生業の

場が同時に衣食住の場としての生活

に於ける消費の共同の場をわしめる

同一家庭内で生活するものである

たうあうう。

私は今人の生活文化史の書について

を同じくせやうとするのはなによりであ

第二章 職域集団

一 家族をとりこみ、協力して農作業をする農家

は家族が職域^{職域}集団を成して居る。都市の小

商工業者の中にも家族で協力して高

め又は工業を営んで居る場合がよくある。

之れも家族が職域集団をなして居る

場合である。こんな家族職域集団に我

族のしるゝ一人来りかゝる場合がよくあ

る。明かに雇傭契約による雇い

主と者を一人かゝる場合もある。二人か

けり三人かけり。事業は盛大になつて来た

か否は、家族従業員が中心となつて居る。

わけをしても、人はそんな生活も永いこと
ついに出来た、世に広い道をから俄かに
かくつて生活様式を改じて、共同生活を
する、宗族内で共同の生活に努力する
ことをしたくない。
故に私は甚だしい道をからこの所
らしい生活様式を同じにするに同
意してその少し先の時代を考慮して
肩、下である。然しその少し先の時
代は甚だしい道をの時代にすぎない
いものである。

（第）同一
宗族員の生活様式は純然たる一人一人
が同一國より脱出して他の生活様式に
移る、すなわち、その生活様式は純然たる
一人一人に、その生活様式を同一にする
ことは、その生活様式が宗族員である
者、同生活様の場所である、すなわち、
各宗族員は同一の場所に移る、すなわち、
道を移る、すなわち、水はなす。

此然しである。従業員が、多く
なりついに家族従業員は大部分を、さうして
さうして一人の家族の者のみ、その業務に従事
し、他は多く雇傭者により、さうして、さうして
合しである。

宗族の住所と事業との関係は、
宗族の住所から、その事業として、
水、や、炭炭して、住所す、土地の一部に、
可を設け、場合、最終には宗族の住所と
事業とは、全く同一である、さうして、
場合を考へ、さうである。

右の所、その場所を、最終して、さうして、宗族は、

下の五體を要し

一、宗族地域性

十五五子
生處治部心宗
心宗

金華

大正六年四月

戸部儀整へる。
 又、番の使用人を
 もの一應に
 他人との金
 五人以上の
 知人とし、
 知全知也。

業作
の
(2)
何は
次の
四
種
の
子
を

ふかき集。常盤園。心。うゝはるる。ぬ。

一、京極・堀河・小倉の同時に職域集團をな

事物

二、家族職掌集團に少数の近親者を

かへたよゆふ

三、家族職業集團以底層契約為

便同人在加へた場合

四、宋祚從業員の大部分は、

ハ使向人エ加ヘテ上ル

住居と子業との関係につては次の三

種如芥菜。

一、家族の住居をさつまい、る業所

（^{テラス}の住居）

二、家族の一部をさ業所とするもの

三、住居とさ業所と遠くをわける。

（^{別荘}）

この

今日では供用人も有るさ業所は總て

労働監督所の監督下にある。監督所

長の調査は市の内外を回りて行ないの（^は）

か都市内のみで業所について大抵知ることが

出来る。

昭和二十五年、人口調査をたけ、

有業者の就業の地位を調査し、調査は

この向の事情を明かにして置く。今その中
から北海道内の~~都市~~市と町と村の各々より
一をとりて比較を試みれば次の通りである。

札幌市

各別町

新篠津村

地位別

雇用者全数

3.4

1.1

0.9

単独業主

11.6

24.4

20.3

家族従業者

8.3

55.8

67.0

一般雇用者

54.4

13.5

7.2

工の雇用者

9.6

1.7

0.8

地方の雇用者

8.9

3.1

3.9

付随雇用者

2.3

0.03

求職者

1.6

0.1

計

100

100

100

54.4

9.6

8.9

2.3

75.2

13.5

1.7

3.1

0.03

18.33

7.2

0.8

3.9

11.9

これより先は昭和三十九年の概ね何らかの着目され

2

第一、雇用者ある世帯は概ね市に、町より市
に漸次増加して行く

第二、市後継者ある世帯は町に、町より市に過

ぐい後、減じて行く

第三、一般雇用者は町より市に過ぐ

い、これと並んで増加して行く

これでは一般世帯の中 54.4% 一般雇用者

あり、3.4% が雇用者ある世帯であり、この雇用者

は 6.6%、地方の雇用は 8.9%、建設雇用は 7.5%、

建設雇用

建設雇用は町より市に過ぐ。この一を足して

いはも住民

都市が家族をばなれて職域に於いて後業

して居る。市民の過半数はかくの

如き職域に御く人である。市民の

生活はかくの如き職域集團の生活か

を要する。これは右の数量に於いて居る。

本来職域集團に於いては多くは企業主

が利潤追求の目的のために業務運営に協力

せしむる。一定の契約をもとつて雇用した

人々を形づくつて居る集團である。多くの雇

用者は本来企業主の選からうへよつて相互に

つながる集團である。企業主は雇用者等

より出来るだけ多く採りしめようとする。物

集團が異種である。
社会主義の如く
勤労者である。

よれば、これらの企業体には多くの集団が在るに

思われ、本来がセメントの集団である。

企業体の内部に又は企業体の基礎の上に

ケミカル・ファクトリー的な集団が形成されて

いる。企業体の規模が大きい程、その集団

の増加は著しく、組織も整然とされていく。

。また、企業体の内には多くの集団の組織

が整然とされ、その中には、その中には

封建的上下の集団が在るに代って、その中には

大企業体の形成されていく。相互扶助の組織

や、組織は、その中に在り、その中に在る。

組織を思ふべきである。

を以て

協同組合の組織（賣購買、信用、貯蓄）社会福

進事業、相互保険制度、娯樂、教育、衛生

等々同する組織又は集團の活動等か、是より。

是等の後の集團が是より形成されて行く。

餘り職域集團と云ふは、かくの如く一企業体

の基盤の上に労働の主要の力に生じて行く集團

は、是より其他の組織に形成されて行く集團の

一つの社会的統一として

總体と云ふべきものである。

企業体、本来の組織から考へれば、従来より

企業としての團結、秩序的結合の外に、従来より

労働の業務、遂行上の作業的協力が予想され

て、是より、又、職域集團には、是の如く

多岐の集團、累積して、ついに従軍を相互の

(協同の様式)

了には、精密な指令が生じて居り、大なる職域

に於ては、相互而しての、直接指令の範

一系列の

或は自ら限定されて、純粋の、（同定し

長距離に亘り

交互に、（同定し）、（同定し）、（同定し）

了は、（同定し）、（同定し）、（同定し）

均か、（同定し）、（同定し）、（同定し）

。

了は、（同定し）、（同定し）、（同定し）

了は、（同定し）、（同定し）、（同定し）

了は、（同定し）、（同定し）、（同定し）

了は、（同定し）、（同定し）、（同定し）

回廊部にはかくの如き同様の職場が数多く
有る。片は。

の職、瑞きこの職場に移動し少しして右利

なる職場を求めて移動し少しして又移る。あは。

自由を好む合理的な事を好む現代都市

住民の一般的性格が、云々して云々は當然

ある。一々所にあるより、また組合する人々

因交し、云々して色々の集団が、またまた、

又、集団の社会的圧力、他人の自由を拘束

して来ふ。それ等の集団の一つから、早く

代わつて、代りして、片は、他人の感

いは、片は、あ。

然し、他人の職域、代り、たつては、経

那は、たつては、因交し、片は、二十年以上の勤続

自然の物語は
其の職業が、いふやう
変遷の持主と記
す。意識の物語の
場。此は意識の
作用の全容の
物語である。

者は砂にしくはない。次の事は札幌市に
 ても高知に於て麻屋の経営者として調査した
 うである。(才何玉) ここには女子経営者が多
 数である。男も経営者である。又、
 長期に亘る経営が多い。
 勸業年報によると、その数は、
 2,500とあり、実上の同数として、一つの職
 場を有する他の職場に於けるには容易ではない
 と云ふべきを意味してゐる。色々の事情も
 のと見れば、お茶屋に於ける容易ではない。
 故に、お茶屋に於ける経営は、お茶屋に於ける
 経営とは異なる。

（多量の集積を形成する）
片り

戦時には面流の圈を以て此等の接觸は固定
し、要後して片り。そこに此等急流の拍動を
強く傷つけるのは当然である。此等急流の拍
動は、さういふして、此等急流の同僚の漸次や
無心では、やがてその職場としての追放を意味
する。他の職場に移るには容易である。
身勤続する人々はその如く、試練にたへて片り。
人々である。すなわち、そのは、いつか、と、それは
職場の義務の苦しさを知覚する。片り。
近代都市における此等急流は、一時の一面の
個人的な苦しみ、その拍動と秩序を奪取する
能うの都市人から、いつか、と、あ、それは
都市の衝動における人々の（面流）の過剰である。

強いて言ふべくの

現代大

都市人は職場に居る。而して職場に

は固執した同僚が居る。同僚は常に

人とたうより隣人となる。と共に道義の

冷血肌で監視をせらる。現代大都市

生活は、この道義の防壁があらはに

百鬼夜行の半政府状態に陥つたといふ

ことである。

近代の都市人は家族を失つた。家族を失つた

近隣集團を失つた。村没時代にして

これら道義の源泉を失つた。その代償として

都市人は職場集團である。と云へる。

都市は、この御然んおける混乱による

代表せしめられし。政治都市が
もつた職域に於ては秩序と平静を是と
すべきではない。

次に職域集團の考察は職域集團の
持つ次の性格を忘れずはたしなむ。第一に
つめく職域集團を龍と若衆争議の中
に於ては是れ此集團の一面である。

職域集團に於ては是れは階層は職階
別に於ては所階に於ては恐らく生活水準

に於ては皆そろそろト階層をなして

居る所である。けれども争議に於ては職域

集團は完全に二つの陣営に分れて居る。

大

階級とは

職階

全職域

我々意識により、決定された二つの集團

ある。

階層の上下の二階に分れて

「階層」の上下の二階に分れて

「階層」の上下の二階に分れて

「階層」の上下の二階に分れて

「階層」の上下の二階に分れて

一方は企業を中心とする資本家階級の

階級であり、他は階級の闘争を中心とした

労働者の階級である。

階級に因しては、結果を左右する。従って、この見解

がある。余の父も、このように、階級の闘争

を、意識の中心として、対立斗争の中心と

する。階級はない。又階級の、闘争の中心と

する。階級はない。階級の、闘争の中心と

する。二つの上下集團である。階級は明か

に集團である。階級は、自分自身や成層の

混同するべきではない。余は階級とは近代

都市と密に結合した職域社会に生じた

①労働組合法によれば、労働争議の
 場合労働争議に属す。労働争議を起
 定して争い、他人の企業体によつて
 は争い、争い、争い。争い、争い、争い
 口争い、争い、争い、争い、争い、争い
 あらう。

労働争議に属するは

1. 工場長 2. 主任 3. 労働部長 4. 機械

部長 5. 製造部長 及び一部の係長 (庶務係長)

勤務係長 會計係長

右の係長

普通労働組合との交渉は五名で行われる

を認めとし、もしその一部に欠乏する場合は

係長を加へる。

大の如き斗争的ニ団体の子を意味す

②

職域集團はそれ、如何に美はしい、道義

の自治門をその内へ含んで居やうとし、

知的、科学的企業体のより豊饒なあり

企業体は出来、よりより労働主を擧取

する、よ、よ、利潤の増大を企圖し

経営者中の階級別同工は機合、多量に

階級の階級を計つて居る。職域集團

は何時労働争議の突発に足無ければ、か

多期もある。企業者の飽く、より、より

利潤の追及はかくの如き機合を互に後

然に、其革命のより、より

第五節 生活拡充集團

一群の

余がこゝに生活拡充集團と名づけた所は

集團は其構造において機能において目的に

おいて千種万端である。當り明治年代以

て農村における各種の結社が一般に講中と

呼ばれ其中に各種各様の地集團が全日本

に亘るに亘るに其の可なり生活拡充集團

といふ都市に足る一群の集團を意味す

るに居る。然し凡そ生活拡充集團には皆

一種の共同の性格を有して居る。即ち生活

拡充集團は生活部が吾人の所謂正當

生活の中心に足るべきものである。其

ものである

之を呼んで金曜集會と名づけ、後、この
である。と云ふことは生活拡充集會は
その活動が何であらうと又その成果が如何なる
ものか生活に反映して居るからである
と云ふ。正しく生活の余力によつて行なわれ
てゐる。生活拡充集會に於て人は皆共に
職場が学校に於ける活動をして居る。

（日頃の活動の）

中身の清く近代化するを共に務める。名稱は
は、金、ク、フ、団体、社員の多によつて呼ばれて
あると同様に生活拡充集會も幾つもの名
稱を持つて居る。定年、同好会、青年清
習会、協会の諸語である。一般に文化園

の目的に於ける所より見て、それ等の
クラブや球技は本来その成長途上の余暇に
おけるやむを得ざるものとして存在するもの
である。男子及び女子の社交クラブ、改善や
研究のクラブ、スポーツのクラブ、
愛好的な団体、園遊会等、文芸会等、教
育的な会、学舎、その他形式的
な団体がある。クラブの或るものは
他面的組織であり、或るものは全に面的
又は部分的組織として存在するもの
である。特定の民族、種、年齢、富貴
職業の人の間に限定されて居る。又或る

m



にあつてはそんな新陳代謝がないのである。

それらのうちの何れ機能は成金の国へ

や強気の構造的な格に属してゐる。

キヤンサスのロイレンスと云ふ都市には

以上の金融関係がある。つまり、そのリントは

一九二四年にミントンタウンに四五八の活動

して居る。これを要見した。それは八〇人に

対して一つの割合である。P. 502 二級

金口各都市の市勢力要見には此種一

集の国に属する調査の結果が要見される

である。それからの種々研究をよめる。

手帳は一冊である。大抵のようである。P. 69

知りうは去年より今年元へより二五の部
の多勢を望むれば
市町村とも全町集約団は安否外カ敷の格へ

ある。ミトにタウシンの八十人は一集団の新令

なり。なるべくなくともよい

人約五万の
自治体新令 彦根市には文化団体とい

三十一団体をあげた後、やりくりしているの

団体については詳記されておらず、同市の記

分報告が団体として「40」の書
地域

図、83の婦人団体、14のPTA、25の協同

文化団体、22の児童団体、6の家族団体、
地域

41の神社教団、105の寺院教団、28以上の
書

町図、22の青年団体、40の婦人協会、
R69

附

たの
し
い
事
知

余曰

法蘭西は皆吾人の生活様式を模倣するに

所よりある。この書年(元)に書く(元)

作PTA比皆余可而治也通集圖并

居るものといふ可なり。労働組合は職域

39
 廿
 八
 日
 す
 一
 }
 既
 ハ
 (ホ
 ハ
 又
 軒
 意
 々
 也。

一に
七
万
の

我子(國)市に文化館あり

(圖) 14
L L ~
四 +
五
六
七
八
九
十

5

五十一か所
ある。江戸くさずの職

或
なんもそれく相
智の金眼集團か
存

12 序と思ふ。

一
口
三
十
万

上海道金路市文化局作二十元

△安井君の崇と決り、青年層の調査の
中には「多費、月謝、謝礼等を支解す、集
団」と支解したる集団に、ついで調査を
恐らく格別の調査の集団があるところ。
(生活調査集団には)

団体十人を数へて了る。

人に与るものの地帯は、市では文化団
体、四十六体育団体、十三婦人団体、五宗
教団体、十三青年団、二十九をあげて了る。
各都府によつて調査の基準が、一様にな
る。調査の結果は、全う依頼するものは
ある。結果は、二、三も直接に記名する
的調査をする必要がある。結果は、
一都府内の生活調査集団と見よ。その
全部を知り得る。△目的について文化体
育、レクレーション、外と云ふ三つの概に表現
する。正當生活の余力によつて構成

* 組合集散の多し近代都市には各地方の
 人が集つて居る。知人多く出身も同一
 富多寡も比較的感なく又かくの如く
 従来の勢力が足らぬのもあるであらう。

して今。集団なり如何なる。新目的のみの集
 団も念ふべきなり。 *Benjamin Bee* が
Londoner といふ。都市の位置から集団の分
 別を定ると我々への都市にも確かに
 色々の目的の集団がある様に見える。
 アンタニサン等は同定人や秘密結社と
 ありて居る。一時その名をよく聞いたが、
 今の如きもあるが、これに就く。今は今もな
 かりとある。*

規模や組織について、思案の途中と同
 いく様々の所がある。ほんの一次的
 の教人の集団もあり、何世代にも亘るもの

もあり知れぬ。却て彼等のする所の

もあつたものしあつてあつた。それでは

よく知つては^{（一都市に）}たゞそれであつたから知れぬ。

然しその一ブロックを調査してそこでインテ

ンシブな調査を行ふ事について批判す。

それは出来ぬ。かくして知つた結果は

はかつかた生活態度はそれとは

多量のものは^{（客観的）}のから知れぬ。

都市の社会的研究を一旦不可能と

思はしむ。一つの研究は客観的な生活態度

を^{（客観的）}知ることがある。それは

わが批判からである。そしてそれらの要因

千態万様の形態へ

は云は都市の社会生活の花である、
（都市生活）

華麗な色彩は、
（都市生活）
一足都市を色に分析

マフを（さう）を勃然とさかのぼる

。又都市はこれ等の花を中核とし

て形成され、
（さへ）
その核に足はさる。

然し、
（さへ）
さうでない、我々は

さかすまある。都市社会の基盤は

さかすまは、
（さへ）
と地をたし、組織的

な世帯と地域である、
（さへ）
さかすま

さかた。生活は、
（さへ）
社会はこれ等の

基盤的構造の上層に浮動する

浮動的な存在に過ぎない、
（さへ）
さかすま。

追記

都市社会の一種の都市社会の

一部は生活環境を都市社会とし

て、
（さへ）
さかすま

一、よく住来す。知人友人
一、よく住来す。近隣
一、知人友人は何を機縁として、職、富、利、名、の
一、私利と他人と何れを仁すもか
一、カ豫めの日私利
一、右の成住来す。もの

大都會に於ける近世の経済
十卷 一九五四 大橋 蔵平 著
記念評

施嘉尺報告一語全一語

都市を構成す。主要な集団は世帯
戦場、学校、地区集団、生活充
集団である。これらの集団に於ける

生活力、原因と成る。生ずる。此、今、司、任、
力、成る。結合を成す。原因又は契機を

線、公呼ぶ「世帯」は、血縁、職場から

地獄生活集團

かゝる友人関係に近きところから友人関係

成立

社会関係の型上の模範的関係

親戚

一、親戚——血縁——世帯

二、同僚——職縁——職業集團

三、学友——同窓縁——学友集團

四、隣人——地縁——地区集團

五、通好の友——通好縁——生活愉快集團

六、交友——交友縁——生活愉快集團

一、素人

二、面識

三、知人

四、友人

五、親友

東北の同僚に期待されてゐる

同僚は近縁

親縁か否か

社会関係

都府の下町には同僚と知人の関係

親友の同僚

一般の同僚は、一般の友人と見做さるゝものである。

位に至る。それより血縁関係の及ぶ場合

もある。二、三の親友を同僚には認むる

が、その人達のあつたところ、環境

に一定の型がある。即ち、時代のある

民族のある村落における友人と呼ばれ、人

々の間には、かくあるべきと思考されて

行く。同僚の型がある。友達同志である

は、式に定まらぬ一方、かゝる場合他の友か

たりする、親友かある。友達甲斐のある人

あつた一人は他人によつて思ふべきであらうが、

最も限るに必要を思はねばならぬ。親友

である。その態度が、明示され、最終に命令

て早く終るべき義の存するところもあり
他人の判断に委ねられておるべき義あり
れを拘束しなすめしむ。ゆゑに於ては
都市に於てはゆるみかくのめを拘束の
いふ、矢張り是れとして存しては
友誼關係を認識しては、周囲の色々の人々
或は二人のその關係を是認し、かくとも最低
限の義理が、是に於て是るべき期付して
ある。その期は、重んじられ、命令、周囲の人
は、その者より、是れ、是れ、是れ、
かへり。その義を、是れ、是れ、是れ、
ある。是れ、是れ、是れ、是れ、是れ、
ある。是れ、是れ、是れ、是れ、是れ、

万様の生活に於いて、義理を發動する。形は
極んでゐるが、いし拘り、不道義の何れの發動
に對する。評價は常に正しい順位を占めてゐる

よ。

然し都市に於いては生活が解放的でない。人
對人の二人の友達の關係の内容を知つてゐる。
人は甚だしく又其現存の深さ、浅い。故
に四圍の物事も少く、みに親交の深さ、
浅い。又此關係に期待も少い。けれども
有しな一親ではな。

友達の一人が結婚を決定し、友人はと
んな後師、其力を貸へるか。友人の親や兄弟

の死の場合如何。天竺の場合如何。
葬式の場面に於ける所。

都市においては、職や地位や片腕が
富化と行く傾向を多うつて、その影響を以て友達の関係
は固定するが、困難である。

都市を以てある純粋な能く友を友と
相与に期待するよりは都市民も中々其れも
固くはあらず、何れも金額の少ない

生活をして居る都市民は打算を以て
余力なく、自から純粋な打算から多く
たのしみ、かくて相互に打算を認め合ひ
つゝ純粋の節力を勤ばし、片の都市

都市

山お

第一 未知人
 第二 知人
 第三 友人
 第四 血縁

知人以上の同族は都市中にもあるが、
 都市には未知人と血縁の同族は
 少ない。都市には未知人が多い。

は、はい、その集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

い、これは集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

い、これは集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

い、これは集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

い、これは集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

い、これは集團の永續的な面同族と

ある。山おさん、おれは知人の同族に

俗を先ずくすもさへある。

此は都市に於ける構成する各種業

種が何れも知人同好を起せしむる

契機を作するを認めようとする。何れ

の業同好より最も多く知人の交好を

おこすは定めて歌謡のいはたしか。歌謡

はこれに拙劣の云々を最も多くかへ

集同好は何れの業同好よりもよくある。

それは分るであらうが、知人同好に

比する限り同好を多く作る業同好も

同じであるが、友人や血縁者で交好せし

むる可成り多き業同好は何れのもの

友人の交遊略
 一 遊ばう友 娯楽
 一 親友の友 伝束
 一 力友 代々傳 保身人 子弟世に
 一 勿庸の友

はより愛をて身。死に至るまで、
 一 何を思ふより、
 一 是れは二十才前後、
 一 今も機心の多かり、
 一 高きるるれ、
 一 くらか、
 一 昔ねん都市、
 一 又、
 一 同様に、
 一 ちと、

[illegible]

期 次	期 間	取 業 年 数							取 取 度 数				同 取 年 分 布		
		1~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	70	0	1	2	3	第1代同取	世代同取	高世代同取
a	18	6	0	0	2	2	1	1	11	7			2	15	1
%		32.3	16.7	16.7	11.1	11.1	5.6	5.6	61.1	38.9			11.1	82.3	5.6
b	26	12	4	2	5	2		1	15	7	2	2	7	13	6
%		46.2	15.4	7.7	19.2	7.7		3.8	57.7	26.9	7.7	7.7	26.9	50	22.1
c	33	14	8	5	2			4	16	16	1		4	29	
%		42.4	24.2	15.2	6.1			12.1	48.5	48.5	3.03		12.1	87.9	

组别	性别	现 取 年 数								取 取 度 数				周 取 率 分 布		
		1-10	11-20	21-30	31-40	41-50	51-60	7-9	0	1	2	3	前5年内周	5-10年内周	10-15年内周	
I	38	17	7	4	4	1	1	4	20	15	1	2	7	21		
II	39	15	8	6	5	3		2	22	15	2		6	26	7	

南 集										山 田							花 園										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
現存年數	5	6	10	16	17	20	4	15	7	28	47	26	2	1	10	3	60	5	3	5	10	12	7	25	60		
取原 (1)				人夫	農		製菓						神樂屋	新倉店	新貨店		神樂店	市吏	宜吏	甜品商			古物商				
(12)				坑天	坑天		会和負																菓子商				
(2)				煙天			兼喜三																				
世代	現	公賣	祝禮産	青果肉	工員	工員	杉南産	炭	金賣	銀行南	織甜肉	木工駄	十二	華商	店員	行員	茶舖	雜貨店	公和負	船買	釜物産	洋服産	建機産	大工	靴製造		
力取米	代利	公便	官更		頑	鬼	頑	農	不度向	木精		大工	自動車通	洋服店	雜貨店	旅館業	食物店	宜吏	宜吏	農	心産	菓子商	農	靴製造	農		
之代利	農			農			農		農				不明	不明	不明	不明	不明	不明					不明				